

人を幸せにする  
仕事を選んで

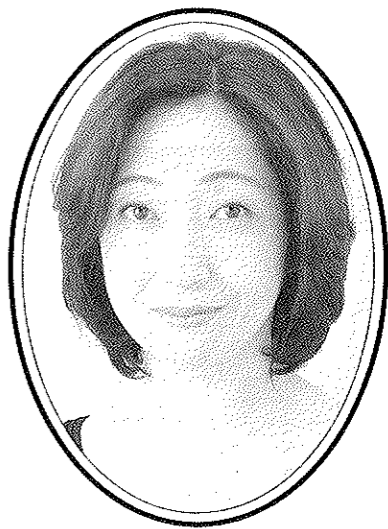
建築家として福岡を拠点にご活躍と聞いています。

松岡 現在は地元・福岡を拠点にしていますが、海外も長かったですし、こういう時代ですから建築家なんてプロジェクトがあればどこにでも飛んでいく、フリーテンの寅さんのような毎日ですよ(笑)。

建築家を目指された動機は?

松岡 子どもの頃からピアノを弾いたり、本や映画が好きだったり芸術全般に興味がありました。ただピアノストになるとか、作家になるとか、どれか一つ拔きんでた才能があるわけはないなど。ある時、「建築は総合芸術である」という言葉に触れ、「それじゃ建築を勉強してみようかな」と漠然と思ったことが一つ。

もう一つは、経営者である両親の影響で、自分もどこかの勤め人で一生終わることはまったく想像できませんでした。そのためには資格が必要かと思つて、弁護士になろうと考えた時期もありました。ただ、父は「弁護士は素晴らしい仕事だ」とさんざん言った後で、「でも弁護士の仕事は、事件とか争いとか、何か問題が起きた時に成立するものだよ」と。建築は創造によつ



インタビュー ● 第一線で活躍する女性

## 人と人をつなぐデザインで 架け橋となる仕事をしたい

て世の中にハビネスをもたらす仕事か  
など思い、この道に進みました。

いまとなつては弁護士はとも務ま  
らなかつたと思うし、正しい選択だ  
たと思います(笑)。

建築の道でよかったと。

松岡 建築は間口も奥行きも広い  
ですね。芸術的なこと、技術的なこと、  
コストバランスなど経済的なこと、あ  
るいはCOなどの環境的なこともすべ  
て建築には含まれます。同時に現在の

日本だけでなく、世界の流れ、歴史・  
伝統も視野に入れていなければなら  
ない。「これでいい」というものがない  
無限の世界です。建築という窓で過  
去・現在・未来の世界を見つめ、そ  
から自分の作品を構築していくところ  
がとてもおもしろい仕事だと思ひます。

ある種の混沌に方向づけをする  
それが建築家の仕事

「昨年開通した新北九州空港連  
絡橋も設計を担当されていますね。

松岡 一口に「建築」と言っても専  
門分野はいくつにも分かれていて、ダ  
ムや道路をつくる土木、アーバンデザ  
イン、建築、インテリアなど様々です  
が、ほとんどが分断されてはばらばらに  
仕事をしています。

その結果が、たくさん古きよきも  
のを失い、脈絡なく建物が立ち並ぶ  
まの日本です。遅きに失した感もあり  
ますが、これからは真によりよい国土  
を目指して、各分野が手を携えていく  
ことが重要です。私は海外で仕事をし  
てきたし、家具のデザインから、イン  
テリア、建築、土木と横断的に体験す  
る幸運にも恵まれました。各分野の架  
け橋のような仕事をすることが自分の  
使命であり、後から来る人たちにも参  
画してもらいたいと思つています。

「お仕事の中で一番喜びを感じる  
のはどんな時ですか。」

松岡 月並みですが、使っている人  
が喜んでくれる時ですね。いくつか集  
合住宅をデザインしましたが、住んで  
いる人が喜びを伝えてくださる時など  
最高にうれいしです。

信号機から照明器具などを含む、道  
路のデザインをしたことがあります。

アドバイザーとして住民たちの話し合

まつか・きょうこ 福岡県生まれ、昭和62  
年九州大学工学部建築学科卒業、平成2年東  
京都市立大学大学院修士課程修了、3年コロン  
ビア大学大学院修士課程修了。7年台湾実践  
学院非常勤講師をはじめ、国内外のデザイン  
教育に関わる一方、16年福岡県美しいまちづ  
くり賞受賞等、自らのデザインを評価されて  
の受賞歴多数。19年東京電機大学未来科学部  
建築学科准教授就任。

## 建築家 松岡 恭子

松岡 あのプロジェクトは二十代の  
終わりから関わって、完成し、開通し  
たら四十代になっていました(笑)。全  
長二・一キロの海上橋で、実に十三年間  
を費やした作品です。

橋は土木の花形プロジェクトで、最  
初の会議に出席したら見渡す限り土木  
の関係者ばかりでした。土木と建築は  
近いように見えて、専門用語から何か  
ら何まで、実はまったく意識が違うん  
です。だから最初の数年は、私は迷惑  
な存在だったと思ひますよ(笑)。暴れ  
馬のようになががアイディアを出して  
模型をつくって、「こうしましょう、  
ああしましょう」と言うんですけど、  
みんなコメントがないんです。「なん  
だろう、この姉ちゃん」みたいな(笑)。  
具体的に土木と建築はどこが違  
うんですか。

いの段階から参加しましたが、最初は  
街路樹を植えるかどうかでさえ住民同  
士が侃々諤々。二年近く話し合いに付  
き合った結果、住民と連帯感が生まれ  
ました。完成後、半年に一度視察に行  
くと、必ず町の人々が「松岡さん」と  
声をかけてくれます。「道、どう？」  
と聞くと「おかげで楽しくなったよ」  
と。立ち話したり、ベンチに座ってお  
しゃべりしたり、「道はコミュニケーション  
ションの場だと分かった」というん  
ですね。

最近近所の農業高校の生徒が育て  
た花を買ってきて、自分たちで歩道に  
植えて手入れしています。さらには将  
来、その手入れを子どもたちにさせよ  
うとしていて、道を通して世代のバト  
ンタッチをしようとしているんですね。  
それは私のシナリオの中にはなかった  
ことで、大変教えられたし、励みにな  
りました。

結局、デザインは人と人を結んでい  
くものだと思います。物理的にそれを  
利用する人同士をつないでいくし、制  
作段階で私たち担当者をつないでいく  
そしてもちろん、私たちが死んだ後も、  
世代を超えてそれを使い続ける人たち  
がいます。デザインは人と人をつなぐ  
それがここ最近の実感であり、喜びで  
もありません。

松岡 土木は安全な橋を造ることを  
考え、建築は空間をどう使ってもら  
うかを考えます。この橋に関しては、陸  
から海を越えて島に渡り、空に飛び立  
つというダイナミックな体験を表現す  
ること、橋自体はもちろん、周囲の景  
観も美しくなること、そして車で渡る  
だけでなく、来るのが楽しくなる場所  
にしなければと思ひ、橋の袂を公園化  
するなど試みました。実際、いまでは  
イベントをしたり、ウォーキングする  
人を見かけます。

土木は期間が長いですし、発注主で  
ある行政の担当者が二年ごとに入れ替  
わり、その都度リセットされるような  
感じがありました。前の担当者がいい  
と言ったことも、次の人は「それは本  
当に必要なの？」と。もちろん人間関  
係を築くまでに時間もかかりますし、

「そういう中で、十三年もの間ご  
自身を支えてきた原動力は何ですか。」

松岡 「もつとよくなる」と信じ、  
それを共有することでしょか。建築  
家の仕事は一人では完成できません。  
いくら私が「ああしたい、こうした  
い」と旗を振っても、私自身は釘一本  
も打てない。だからたくさん関係者  
を要するのですが、みんなモチベーシ  
ョンもばらばらで、違うことを考えて  
います。そのある種の混沌の中で、